

地域開発と季節湿地に残された森 ータンザニア，ムボジ県の事例ー

平成 19 年 転研究科
派遣先国：タンザニア
山本 佳奈

キーワード：季節湿地，経済自由化，草地焼畑，トウモロコシ，放牧地

対象とする問題の概要

タンザニア南西部のムボジ高原には、雨季に水浸しになる季節湿地が広がっている。そこでは牛が放牧され、部分的に在来の草地焼畑がおこなわれてシコクビエが栽培されてきたが、それらは湿地の生態環境を変えてしまうようなものではなかった。1990 年代に入ると、一部の住民たちが季節湿地の中に排水溝をめぐらしてトウモロコシを栽培するようになっていった。経済の自由化や人口圧の高まりにともなう農地不足を背景に、季節湿地を農地化しようとする動きはタンザニア全土で見られ、各地に点在する湿原はまたたく間に畑へと変えられていった。調査地のボジ高原においても、湿地の草原は急速に農地化されて生態環境も大きく変化していったが、こうした変化の過程では、伝統を重んじる村評議会や古老たちと、世帯の生計を慮る壮年層との間に繰り広げられた、数年間にわたる壮絶な争いがあった。

研究目的

季節湿地の利用をめぐる争いの結果、季節湿地の大部分にトウモロコシ畑が開かれ、広大な畑の真ん中に小さな森だけがぽつんと残された。この森は現地の言葉で「アハシトゥ・アハピーナ（孤独な森）」と呼ばれ、以前から草原のなかに孤立していた。季節湿地の大部分がトウモロコシ畑として開かれたにもかかわらず、なぜこの森だけは畑として開かれずに残されたのか。神秘的な逸話に彩られたこの森は、伝統的な儀礼とも深い関わりをもっている。そうした伝統社会の象徴ともいえる「孤独な森」は、生態環境よりも市場経済が偏重される農村社会のなかで、何を人びとに語り



写真1 季節湿地のなかに孤立してある小さな森。
現在まわりはトウモロコシ畑に囲まれている。

継いでいくのだろうか。環境破壊が急速にすすむタンザニアの農村において、象徴的に残された「孤独な森」の意義を、社会的な視点から明らかにすることを本研究の目的とした。

フィールドワークから得られた知見について（～800字）

調査対象の季節湿地の真ん中に浮かぶ「孤独な森」には不思議な泉が湧いている。ニイハの古老たちによると、泉の水は時々刻々と色に変化し、つねに水が湧き出しているにもかかわらず、外にあふれ出ることはないという。この地域のチーフや重臣の古老たちはこの森を神聖な場所とあがめ、旱魃になれば、この泉から水を汲んで雨乞いの儀礼に用いてきた。1990年代前半、アップランドの土地不足を背景に、一部の村人が湿地でのトウモロコシ栽培をはじめ、それは神聖な森まで迫っていった。重要な森が侵されるという危機感を抱いた古老たちは、季節湿地の耕作を中止するよう村評議会に申し出た。しかし、開墾者の多くが敬虔



写真2 雨乞いの儀礼に使う水を汲んでいた泉



写真3 森の中の風景

なキリスト教徒であり、祖霊信仰に対して否定的であったために、古老たちの訴えは聞き入れられなかった。そこで村評議会は、儀礼的に重要な森が侵されるという理由ではなく、湿地環境の保全や放牧の維持を理由に、季節湿地での開墾を阻止しようとした。開墾しはじめた人々のなかには、十分な土地をもたない若者や移住者たちが含まれていて、村のオフィスで何度も反省文を書かされ罰金を徴収されたが、それでも開墾は続けられていった。土地不足という問題が深刻化するなかで、最後には、古老たちも儀礼に使う森をそのままにしておくことを条件に、季節湿地での開墾を認め、それに応じて、村評議会が一定面積の放牧地を確保しながら、季節湿地での開墾を公に許可した。

今後の展開・反省点（～400字）

季節湿地で、小さな森がトウモロコシ畑のなかにぽつんと佇む姿は、日本の田園や立ち並ぶ家々のなかに残された「鎮守の森」の景観と似ている。鎮守の森について米山 [2004] は、「鎮守の森とは、地域住民による自発的な保存の意志がはたらき、その手による維持がつづいているローカルな森林である」と述べているが、調査地の小さな森も古老をはじめとする地域住民たちが急速な開発から守りぬい

た、象徴的な森なのである。鎮守の森の意味や役割について、景観の核となり、動植物再生、その活動拡大の基地となってきたこと、周辺に生きる人びとの精神形成にも影響を与えてきたことなどが指摘されている [野本 2004]。森林破壊がすすむ調査地において、季節湿地の真ん中に残された小さな森は、地域住民の環境に対する意識にどのような影響をもたらすのかが、今後の研究課題となる。

▪ 参考文献

米山俊直. 2004. 「鎮守の森探訪：文化人類学の視点から」上田正昭編『探求「鎮守の森」：社叢学への招待』平凡社, 105-128.

野本寛一. 2004. 「禁伐伝承と入らずの森：民俗学の視点から」上田正昭編『探求「鎮守の森」：社叢学への招待』平凡社, 45-82.